透かしを削除する Wondershare PDFelement

エピローグ コラム

書によって受け継がれる心とアイデンティティ

特集の最後に、継承の精神について心理学の世界から迫ります。発達臨床心理学が専門で、〝世代継承性〟も研究テーマとする広島大学名誉教授・岡本祐子氏が解説します。

文／岡本祐子
（広島大学名誉教授・臨床心理学）

はじめに

本号の特集は、「受け継がれる書」である。そこには、書道家としての技と心が、世代から世代にわたってどのように継承されるのかというアイデンティティの問題と、「書」そのものが作者の死後も次世代に受け継がれ、後世の人々がそこに顕れた精神をどのように受けとめていくかという心的世界の継承の、世代継承性についての二つの大きなテーマが内包されている。

一幅の書、一枚の絵画、一個の陶器など、芸術家や職人の心魂を傾けた作品には、その作者の境涯が余すところなく顕れているのではないであろうか。境涯とは、作者が自らの経験の中で辿りついた心奥の世界である。そのような作品に出会った時、私は、作者が自らの世界に自己を投入し、これほどまでの技と感性を自分のものとするまでの道行きに思いをいたし、畏敬の念をいだかずにはおれない。

人がその世界に出会い、数々の技と精神を受け継ぎ、心血を注いで作品を生み出すその道行きは、作者自身の「人間探求」そのものであると思われる。文化、芸術、学問、宗教などの世界におけるプロとしての仕事は、古いものと新しいものが重なり合い、少しずつ形を変えながら、ゆっくりと発展するものである。そこでは基本的なものが決定的に重要な意味をもつ。その基本、つまり「型」を血肉にし、それに拠って自己を訓練することで初めて、人はその世界に参入することができる。そして、その基本・土台となる「型」を自分のものにした人々は、自己の内的な創造性を生涯にわたって発揮し形にしつづけることができるのであろう。

私は、臨床心理学を専門とし、青年期以来、アイデンティ

271号_p038-040_岡本先生_0609.indd 38 2021/06/09 15:31

透かしを削除する Wondershare PDFelement

ティの生涯発達と危機について研究してきた。青年期に一応のところ獲得されたアイデンティティ（＝自分は何者で、どう生きていくのか）は、その後の人生の中で、危機に遭遇する毎に問い直され組み直されて深化していくことがわかってきた。しかしながら、そのアイデンティティが次世代にどのように受け継がれていくのか。精神分析家 エリクソンは、中年期の心理社会的課題として世代継承性、つまり次世代に関心を持ち育（はぐく）むことを挙げているが、その心的実相については、驚くほどわかっていない。

ミクロな継承とマクロな継承

専門的精神、技、知識や知恵の継承の営みとは、どのようなものなのであろうか。歴史をはるか遠くにさかのぼった時代から、人類は、上の世代から何ものかを学び、次世代に伝えるという営みを繰り返してきた。伝承の営みには、ミクロな継承とマクロな継承という二つの次元がある。ミクロな継承は、師と弟子の一対一、もしくはごく少数の間で、顔を合わせ、師の息づかいまでをわが身に感じとりながら体験される直接的な関係性の中で行われる継承の営みである。それは、書物という紙媒体を介さない口伝の形をとることも少なくない。

この対極にあるのが、マクロな継承である。これは、私たち人類の文化史そのものであるといってもよい。それらは、その国や土地で生まれ、その空気を吸って生き、無意識のうちに自分の心と体に沁みついた生活・生き方・文化を土台として多岐にわたる。各国・各地に継承されている祭りや儀式は、その文化の価値観・死生観・生き方を象徴的に示している。

学問や技能の継承の歴史をたどってみると、古代ギリシャ、ローマの時代においては、多くの場合、それは口伝の形で行われた。紙の生産技術の向上、さらに十五世紀の活版印刷技術の発明によって、口伝は、紙媒体による継承へとってかわられた。しかしながら、今日でもなお、伝統的技能・芸術や宗教の世界では、口伝や師の所作を直（じか）に見取って自分のものにするという継承が生きている。この域に達すると、師が多数の弟子に、自分の持てる技と精神をすべて伝授することは不可能に近い。したがって、特定の継承者にのみ、秘儀を伝授することになる。技芸や学問の師が、その奥義や本質を弟子の中の一人にだけ伝え、他のものには秘密にするという「一子相伝」の世界である。

禅の世界にみる世代継承

本号の主題である書については、私は全くの門外漢である。書道家が師に就いて、どのようにその技と心を磨いていくのか、その師と弟子のミクロな継承のありようについては、残念なことに私は知らない。しかし「書」については、私は若い頃から禅僧の墨蹟に親しんで生きてきた。

禅宗には、参禅（さんぜん）という独特の修行法がある。老師は、修行者に公案（こうあん）という「問題」を与える。公案とは、古来、修行者が悟りを得たその瞬間の体験を、修行の課題として体系的にまとめた問答である。一般にも知られている「隻手音声（せきしゅおんじょう）」（片手の声を聴け）という公案に端的に示されているように、公案は知的に考えて、その答えを求めようとしても、それは不可能である。「隻手」の中に自己を没入し、自己を忘れ、隻

271号_p038-040_岡本先生_0609.indd 39 2021/06/09 15:31

透かしを削除する Wondershare PDFelement

手と一体となったところに隻手の声があり、同時に自己があるのである。修行者は、老師から与えられた公案を、坐禅をして拈提（ねんてい）し、毎日の「独参（どくさん）」の時間に、老師の室内に参上し、自らの見処（けんしょ）を述べる。それはまさに、老師と修行者の一対一の真剣勝負である。

幸運なことに、私は青年期の約十年間、臨済宗の老師に就いて参禅をする機会に恵まれた。参禅の師は、臨済宗大本山佛通寺派管長 藤井虎山（ふじいこざん）老師（一九〇一―一九九二）であった（図1）。学校・大学という正規の教育の場とは全く異なる世界でのこの経験は、自己と他者の見方、危機への向き合い方など、私の人生に決定的な影響を与え続けた。禅の修行の目的は、「本来の自己」の探究である。老師は多くを語らない。言葉にすると、それはすでに知性を超えた禅の真髄から外れてしまうからである。

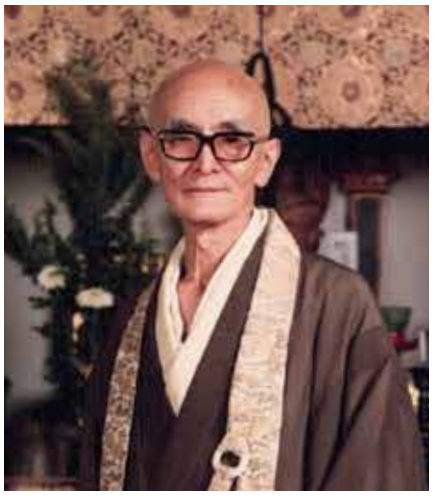

図1　臨済宗大本山佛通寺派管長
藤井虎山老師（佛通寺にて）

図2　藤井虎山老師「円相」

禅寺での修行は、厳しい規律の定められた極めてハードな生活である。しかしながら見方を変えると、実際の禅寺は修行者を真摯に誠実に受け入れ、非常に大らかで温かな母性的な世界であると、私は感じてきた。老師を、独参や提唱（老師による禅講）からだけでなく、全人格的に見て、その姿、立ち居振る舞いから師の到達した境涯を盗み取り学ぶという関係性は、言葉によらないミクロな継承の具現である。

世代を超えて受け継がれる「書」の持つ力

藤井虎山老師が揮毫されたものは、書（墨蹟）だけでなく、禅画も数多く遺されている。老師は、禅画を誰に就いて、どのように腕を磨かれたのかは知られていない。おそらく時空を超えた豊かで鋭い感性の持ち主であった老師の独自の創意で身につけられたものあろう。そしてその墨蹟や禅画には、老師の禅の境涯が余すところなく顕れ、見る者に迫る（図2）。

図3は、藤井虎山老師が揮毫された「達磨」の画である。虎山老師遷化後の現在もなお、佛通寺の玄関横の部屋に掲げられており、ものすごい迫力で修行者を迎えている。

中国 南宋の禅書『無門関』（無門慧開（むもんえかい）、一二二八）に、「胡子（こす）無鬚（むしゅ）」という公案がある。「西天の胡子、甚（なん）に因ってか鬚なき」。「西方インドから来た人（＝達磨）にどうして鬚がないのか」という問いである。達磨大師と言えば、茫々とした鬚を蓄えた大男である。その達磨になぜ鬚がないのか、と修行者に迫る。ここから得られる境地は、「有」と「無」にとらわれないあるがままの世界である。このあいだ、鬚を剃ったと思ったら、また生えてきたなあ。「野火（やか）、焼けども尽きず、春風吹いてまた生ず」（白氏文集）。それは、自己と自然が一体となった、自己を忘れた世界である。虎山老師の「達磨」画を見るたびに、私はこういう世界が心に広がる。「書」は、その作者が故人となった後も世代を超えて、書を見る人に作者自らの心的世界を伝える。書による世代継承の醍醐味はここにあると私は考えている。

図3　藤井虎山老師「達磨」画

271号_p038-040_岡本先生_0609.indd 40　2021/06/09 15:31